うひはたぶみ（初機踏）

H.A.M.A.木綿庵だより
第７１号
2023(令和5)年10月26日
（編集発行 梅田正之 090-5042-7775）

和綿と洋綿、棉か綿か　―　呼称の混乱 その２　―

ワタの種類を表す言葉として「和綿(わめん、わわた)」、「洋綿(ようめん、ようわた)」があります。当庵でも圃場の説明板や、種の頒布においてはもっぱらこの言葉を使用しています。ただ、この言葉はあくまで通称であって、正式な呼称ではありません。また、ワタを漢字表記するにあたり、「棉」と「綿」が用いられることがあります。これはどちらが正しいかという問題ではなく、あくまで使用する側の位置づけ、意識の問題です。今回はこの２点について整理しておきたいと思います。

和綿という言葉から、日本原産のワタという印象を持たれる方が少なくありません。が、日本でワタの栽培がおこなわれるようになるのは戦国時代以降、すなわち15世紀末から16世紀中頃にかけてと考えられています。インド・パキスタン発祥のアルボレウム種が、中国、朝鮮半島を経て日本に伝えられ、その後日本各地で栽培されるようになりました。植物はその土地の風土、環境に適応しながら少しずつ変化していきます。また、人工交配や突然変異によって同じアルボレウム種であっても、栽培地ごとにさまざまな特徴を持った品種が生まれてきます。たとえば河内綿、伯州綿、大島綿、真岡綿などと呼ばれる伝統的な在来種がありますが、いずれも種(しゅ)としてはアルボレウムであり、日本原産ではありません。江戸時代後期に刊行された『綿圃要務』(天保4年、1833刊)に取り上げられている「かぐら、八寸黄花、備中ころり、山城麻わた、権九郎、河内ぼたん、赤わた、青わた、阿波、土佐わた、和泉綿」(『日本農書全集』第28巻、P346～351)のほか多数の品種も同様です。和綿とは、いわば江戸時代以来日本各地で栽培されてきたこうした各品種の総称、と言うことができます。そして、洋綿とはこれに対して江戸時代末期の開港以降に日本に入ってきた、おもにヒルスツムをはじめとするアメリカ大陸(新大陸)原産のワタ、ということができます。

ちなみに、栽培種4種の原産地について、『地域資源を活かす生活工芸双書 棉』(2019年、農文協)には、アルボレウムは「アジア起源でインド、パキスタンが発祥」、ヘルバケウムは「アジア起源でイランが発祥」、バルバデンセは「ペルーが起源とされる」、ヒルスツムは「メキシコが起源とされる」とあり、とくにアルボレウムについては「和綿の先祖」と記されています(P10 ～ 11)。

なお、同書には棉と綿の違いについて、以下のように説明がなされています。

> 漢字の「ワタ」にも、木へんの「棉」と糸へんの「綿」がある。木へんの棉は植物としてのワタに使われ、糸へんの綿は綿花の繊維になってから使われている。最近ではすべて糸へんの綿が使われているようだが、とりあえず、ここ(編註:同書中)では棉で書いていくことにしたい。(P10)

参考までに手許にある書物の書名を確認しますと、大正8年発行『日本棉作要説』(蚕業新報社)、大正9年発行『棉花學』(有朋堂書店)、昭和9年発行『日本棉花栽培法』(丸山舎)など、戦前の書物では植物に関するワタにはたしかに「棉」が用いられています。

1号畑の和綿栽培畝の案内板

Monthly Data

【天理やまのべ木綿庵】(問い合わせ件数 令和5年8月26日～令和5年10月25日)
福島県１、茨城県２、埼玉県１、東京都２、神奈川県１、大阪府１、奈良県１、福岡県１
【H.A.M.A.木綿庵】(令和5年8月26日～令和5年10月25日)
メールを含む各種相談件数７、綿畑や作業場の見学を兼ねた事前申込済来庵者数８組１４名

《綿の栽培記録 2023》－ 令和5年度版　その5－

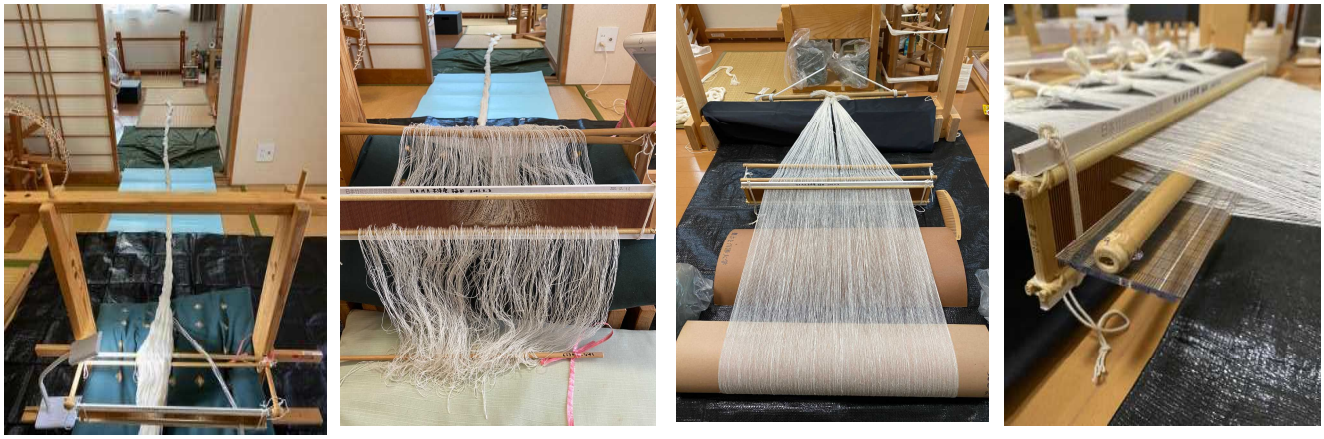
天理市乙木町における梅田の感覚的気象観測データ（令和5年8月24日～10月24日）は、Livedoor Blog「綿の栽培記録」（H.A.M.A.木綿庵のHPのホーム画面にもリンクあり）をご参照ください。

8月下旬より次々に吹き始めた綿は、和綿、洋綿ともに9月中旬から下旬にかけて収穫盛期を迎えました。10月に入ると洋綿はお天気次第できれいに弾けるものの、和綿が弾ける数は目に見えて少なくなりました。今年は綿木の生長をあえて抑え気味にしたことにより、収量は少なめですが、洋綿アプランドに関しては、例年以上にきれいなコットンボールを多く収穫することができました。

写真は上段左から、和綿2枚、洋綿アプランド2枚、下段左から7号畑アプランド&スーピマ交雑種2枚、14号畑同2枚。

《経糸の巻き取り ―　令和5年9月24日、10月4日 》

経糸（たていと）を伸ばし、ちきりに巻き取っていく作業です。粗筬（ありおさ）を持ち合わせていないため、筬に通して幅を決めていきます。糸端は整経用の支柱を代用。8kgの鉄塊4個で安定させます。最後は、畦棒を筬の手前から向こう側に移す「畦返し（あぜがえし）」。無事に移動させることが出来ました。



【研修等の記録】

・令和5年10月09日　栽培農家さんからの依頼を受けトウモロコシ「大和ルージュ」のヒゲで草木染め。